



|              |                                                                               |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | ペルシア語における動作継続と結果残存の表現                                                         |
| Author(s)    | ジェイ, ベヘナム                                                                     |
| Citation     | EX ORIENTE. 2026, 30, p. 49-59                                                |
| Version Type | VoR                                                                           |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/104285">https://doi.org/10.18910/104285</a> |
| rights       |                                                                               |
| Note         |                                                                               |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## ペルシア語における動作継続と 結果残存の表現

ジェイ ベヘナム

### 0. はじめに

ペルシア語には、日本語のテイルに形式的に1対1で対応する単一の文法形式は存在しない。当然ながら、固有名詞を除けば、文法形式および意味の両面において他言語と1対1で対応する表現が存在することは稀である。類似した手段によって対応が見られる場合もあるが、それでもなお、ペルシア語と日本語の間には対応関係において大きな隔たりが認められる。動作の進行や結果状態の保持といった意味は、動詞の時制・アスペクト形式、助動詞構文、コピュラ文など、複数の手段によって表現される。この点において、日本語のテイルが担う意味機能を、ペルシア語がどのような形式によって表現しているのかを明らかにすることは、両言語のアスペクト体系を比較する上で重要である。

本稿は、日本語のテイルによって表される用法のうち、とくに結果残存と動作継続の2つに焦点を当て、それぞれがペルシア語においてどのような形式によって表現されるのかを検討することを目的とする。具体的には、状態として解釈される場合、進行中の事象として捉えられる場合、完了後の結果状態として描写される場合などの区別に注目し、日本語とペルシア語の対応関係を明ら

かにする。これにより、日本語のテイルの多義的性質を、ペルシア語のアスペクト表現との対照を通して再考することを試みる。

## 1. 基本情報

ペルシア語はインド・ヨーロッパ語族のイラン語派に属する言語であり、語彙・形態・統語の各側面において、同語族に共通する特徴を多く保持している。一方で、歴史的・文化的接触を通じてアラビア語から多くの語彙を借用しており、現代ペルシア語の語彙体系にはアラビア語起源の語が広く見られる[Perry, J. R. 2002]。ただし、これらの借用語も、ペルシア語の文法体系の中で再解釈され、動詞活用や統語構造そのものは基本的にペルシア語固有の体系に従っている。

ペルシア語の話者数は1億1千万人以上とされ[Sedighi & Shabani-Jadidi 2018]、話者は主にイラン、アフガニスタン、タジキスタンに分布している。現代ペルシア語は、イランではペルシア語 (Farsi)、アフガニスタンではダリー語 (Dari)、タジキスタンではタージーキー語 (Tajiki) と呼ばれ、それぞれの国・地域において統語面および語彙面で一定の方言的差異が認められるものの、相互理解を著しく妨げるほどの違いは存在しない。本稿では、現代ペルシア語の標準語とされるテヘラン方言を分析対象とする。

形態論的には、ペルシア語は屈折語的性格を有し、とくに動詞において、過去語幹と現在語幹という2種類の語幹を区別する点が重要である。一般に、現在形、命令形および接続法を表す際には動詞の現在語幹が、過去の出来事を述べる場合には過去語幹が用いられ<sup>1</sup>、トルコ語や日本語のように単一の語幹に時制語尾を追加する体系とは異なる。これは本稿で扱うアスペクト的意味を理解する上での基礎的特徴である。

また、ペルシア語の動詞には過去分詞 (past participle) が存在し、これは動詞の過去語幹に接辞の *-e* を付加することによって形成される。この過去分詞は、完了した事象を表すだけでなく、しばしば形容詞のようにふるまい、名詞

を修飾したり、状態を表す述語として用いられったりする点に特徴がある。この性質は、結果残存の表現を考察する際にとくに重要となる。以下、*Šekastan* (to break) を例に取り、ペルシア語動詞における語幹および過去分詞の形成を示す。

(1) a. *Šekastan* (to break) (不定形)

b. *Šekan* (現在語幹)

c. *Šekast* (過去語幹)

d. *Šekaste* (過去分詞)

統語的には、ペルシア語は短文や単純文においては SOV 語順を基本とする。しかし一方で、複文構造においては補部や節要素を本動詞の後に配置する傾向も見られ、結果として SVO 的な語順特性を部分的に併せ持っている [Jahedzadeh 2014:89-92]。次に、ペルシア語において動作の進行や状態、完了後の結果状態がどのような文法形式によって表現されるのかを概観する。上述したように、ペルシア語では、日本語のテイルに相当する単一の形式が存在するわけではなく、事象の捉え方に応じて複数の形式が使い分けられている。

## 2. 調査結果：5つの事象に対する表現

本節では、絵描写タスクの絵パネル [許 1997] に見られる5つの事象をペルシア語でどのように表現するかを見ていく。

### 2.1 〈子どもが川で遊んでいる〉

#### ■自然現象や一般的・習慣的事象として描写される場合

ペルシア語において、自然現象や一般的・習慣的事象が描写される場合、当該事象は特定の一時的な出来事としてではなく、反復性や普遍性をもつものとして捉えられる。このような場合、動作の進行や完了といったアスペクト的側

面は前景化されず、事象は最も一般的に成立する事態として提示される。この種の表現には、主として動詞の現在形が用いられる。ペルシア語の現在形は、発話時点における進行を直接指示するものではなく、自然現象や日常的に繰り返される行為を表す機能を担っている。(2) は一般的に繰り返しが想定される例である。

- (2) *bāčče-hā dar rudxāne bāzī mī-kon-and.*  
 child- PL in river play IPFV-do-3PL  
 「子どもたちは川で遊ぶ。」

また、*dānestan* (to know) のような状態動詞は、知識や認識を恒常的な状態として表すため、「知っている」のように進行中または結果残存の事象として解釈されることはなく、進行形に相当する形式は用いられない。同様に、*zendegī kardan* (to live) も、特定の地点に定住して生活するという恒常的・習慣的状态を表す場合には、進行中の事象としてではなく、単純現在形によって描写される。

#### ■進行中の事象として把握される場合

ペルシア語において、事象が発話時点において進行中であるものとして把握される場合には、一般的・習慣的事象とは異なる形式が用いられる。この場合、事象は恒常的な性質や反復的行為としてではなく、時間的展開の途中にある出来事として描写される。進行中の事象を表す代表的な形式として、補助動詞 *dāstan* (to have) + 動詞の現在形からなる構文が挙げられる。この構文では、*dāstan* が補助的に用いられることによって、動作が現在まさに進行・継続しているという解釈が明示される。

- (3) *bāčče-hā dar rūdxāne dār-and bāzī mī-kon-and.*  
 child-PL in river PROG-3PL play IPFV-do-3PL

「子どもたちは川で遊んでいる。」

(3) では、*bāzī kardan* (to play) という行為が、習慣的行為としてではなく、発話時点において進行中の事象として捉えられている。(2) の単純現在形による表現と比べると、*dāstan* の使用によって、発話時点で進行している点がより明確に示されている。

この進行表現は、日本語のテイルの動作継続用法と対応する一方で、すべての動詞に様に適用されるわけではない。動詞の語彙の意味や事象の性質によっては、次節で述べる結果状態としての解釈や、上述したように状態表現が選択される場合もある。とりわけ、ある時点で状態変化が生じ、その後に動きや変化が継続しないタイプの状態変化動詞については、進行中の事象を描写するために補助動詞 *dāstan* 構文を用いることはできない。

仮にこの構文が用いられた場合でも、それは結果残存や進行中の事象として解釈されるのではなく、事象の発生直前、すなわち発生寸前のアスペクトを表すものとして理解される。このような解釈は、*xābīdan* (to sleep)、*īstādan* (to stand up, to stop)、*nešāstan* (to sit)、*māndan* (to stay) などといった、日本語ではテイルによって結果残存や動作継続として表される動詞に対応するペルシア語表現において顕著に見られる。

## 2.2 〈カップルが座っている〉：完了後の結果状態

事象がすでに完了しており、その結果として成立した状態が保持されていると捉えられる場合には、完了後に存続している状態が描写の中心となる。この意味を表す代表的な形式として、動詞の過去分詞とコピュラとしての *be* 動詞からなる構文が挙げられる<sup>2</sup>。同様に、ある行為が完了し、その結果状態が保持されている場合にも、(4) のように過去分詞を用いた構文で表現される。

- (4) *yek*            *zōj*            *rūye*            *nīmkat*            *nešaste-and.*  
          one            couple            on            bench            sit.PTCP-3PL

「カップルがベンチに座っている。」

### 2.3 〈電気がついている〉：変化のない恒常的な状態

ペルシア語において、事象が変化を伴わない恒常的な状態として捉えられる場合には、動作の進行や結果といったアスペク的な解釈は問題とされず、状態そのものが描写の中心となる。このような場合、ペルシア語では主として形容詞述語構文（形容詞＋be動詞）が用いられる。この場合、事象は時間的展開を持たない状態として表現される。例えば、対象の性質・属性、あるいは存在状態を述べる際には、動詞的表現ではなく形容詞述語が用いられ、それに現在形の *būdan* (to be) が結びつく構文が一般的である。この構文では、事象が一時的な変化の結果としてではなく、発話時点を含む時間区間にわたって持続する、非動的で安定した状態として把握されている点が特徴である。日本語で結果残存のテイルが用いられる以下の (5a,b) を参照されたい。

- (5) a. *čerāq*            *rōšan*            *ast.*  
          lamp            light.on            be.PRES

「電気がついている。」

- b. *dar*            *bāz ast.*  
          door            open be.PRES

「ドアが開いている。」

(5a,b) では、いずれも対象の状態が、動作の進行や変化過程に焦点を当てることなく、発話時点における状態そのものとして提示されている。(5a) では、「点灯する」という出来事が背景に想定されうるものの、文の焦点は「点いている状態」にあり、ペルシア語ではこれが形容詞の *rōšan* とコピュラによって表現される<sup>3</sup>。(5b) においても、「開く」という状態変化を伴う事象が

背景として含意されうるが、その結果として成立している状態のみが取り上げられている。日本語では、これらはいずれもテイルを用いた表現が自然となる点で、両言語の表現上の差異が明確に現れている。このように、ペルシア語では事象を状態として捉える場合、動的な動詞形式よりも、形容詞 + be 動詞からなる構文が選好される点が特徴的である。

## 2.4 〈お金が落ちている〉：完了後の結果状態

〈お金が落ちている〉事象についても、すでに完了しており、その結果として成立した状態が保持されていると捉えられれば、(4) の〈カップルが座っている〉と同様に、過去分詞を用いた構文で表現される。

- (6) *pūl*            *rūye*            *zamīn*            *rīxte*            (*ast*).  
          money        on                ground        fall. PTCP    be. PRES  
          「お金が地面に落ちている。」

## 2.5 〈窓が割れている〉：完了後の結果状態

〈窓が割れている〉事象は、すでに完了しており、その結果として成立した状態が保持されているものであり、(4)、(6) と同様に過去分詞を用いた構文で表現される。

- (7) *panjare*            *šekaste*            (*ast*).  
          window        break.PTCP        be.PRES  
          「窓が割れている。」

(7) では、「割れる」という事象がすでに完了していることが前提とされ、その後に生じた「割れた状態」が保持されていることが述べられている。ここでは、割れる過程や進行は問題とされず、結果状態のみが表現されている点が重要である。



### 3. 考察

表1は、日本語テイルの動作継続および結果残存の各用法に対し、ペルシア語で選択される構文を、事象の捉え方別に整理したものである。

表1 日本語「～ている」例文に対応するペルシア語の構文選択

| 日本語の例文       | 事象の捉え方      | ペルシア語で用いられる構文      |
|--------------|-------------|--------------------|
| 子どもが川で遊んでいる。 | 発話時点で進行中の動作 | dāstan + 現在形（進行構文） |
| 電気がついている。    | 非動格的・安定した状態 | 形容詞 + be 動詞        |
| カップルが座っている。  | 完了後の結果状態    | 過去分詞 + be 動詞       |
| お金が落ちている。    | 完了後の結果状態    | 過去分詞 + be 動詞       |
| 窓が割れている。     | 完了後の結果状態    | 過去分詞 + be 動詞       |

このように、ペルシア語では、事象の捉え方に応じて複数の文法形式が使い分けられ、動作の進行や状態、完了後の結果状態といった意味が分散的に表現される。すなわち、同一の事態であっても、それを変更のない恒常的な状態として把握するのか、自然現象や一般的・習慣的事象として捉えるのか、発話時点で進行中の事象で進行中である特徴を強調し、描写するのか、あるいは完了後の結果状態として表現するのかによって、選択される形式が異なる。このような形式の選択は、動詞の語彙的意味や文脈、話者の視点とも密接に関わっており、日本語のテイルが1つの形式で担っている複数の意味機能が、ペルシア語では異なる文法形式によって分担されている<sup>4</sup>。

本稿では、この機能分担のあり方を明らかにするため、事象の解釈に基づいてペルシア語の表現を分類し、日本語のテイルとの対応関係を検討した。具体的には、①事象を変化のない恒常的な状態として捉える場合、②自然現象や一般的・習慣的事象として描写される場合、③進行中の事象として把握される場合、④事象が完了した後、その結果状態が保持されている場合の4つに分けら

れる。これら4つの区別は、事象そのものの性質に基づくものというよりも、言語の話者が事象をどのように捉え、描写するかという観点に基づくものである。図1で、この分析枠組みを視覚化した。図1では、直線が恒常的で変化を伴わない状態を、波線が動的で変化や動きを内在する事象を表す。直線の前後にある破線の波線は、事象の前後段階への視点を示す。

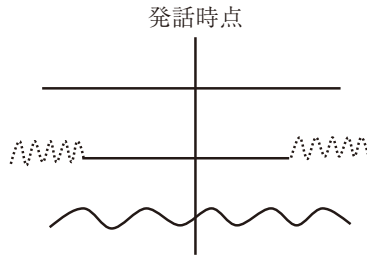


図1 事象の捉え方に基づくアスペクト解釈の整理

図1に示したように、同一の事象であっても、時間的展開や状態性への注目の仕方によって異なるアスペクト的解釈が可能なのである。

#### 4. まとめ

本稿では、日本語のテイルが表す動作継続および結果残存の2つの用法に焦点を当て、それらがペルシア語においてどのような文法形式によって表現されるのかを検討した。分析の結果、ペルシア語では、事象を進行中の出来事として捉える場合、恒常的で前後の変化が焦点にならない場合、習慣的事象として把握する場合、完了後の結果状態として描写する場合とで用いられる形式が異なり、日本語のテイルに対応する単一の形式が存在しないことが確認された。形容詞+コピュラで対応できる形式が一番好まれる一方、「お金が落ちている／カップルが座っている」のように、日本語で結果残存として描写される事象は、ペルシア語では過去分詞を用いた構文で表現され、その過程や進行には焦

点が当てられず、変化の結果としての現状が描写される。

また、「子どもたちが川で遊んでいる」のように、進行中の事象に対応する *dāstan* 構文は、すべての動詞に適用されるわけではなく、状態変化動詞に用いられた場合には、進行や結果残存ではなく、事象の発生直前という限定的な解釈を生じる点が重要である。この点は、日本語のテイルが状態変化動詞に対して結果残存の意味を自然に表し得ることと対照的である。以上の考察から、日本語のテイルは、進行中の事象と完了後の結果状態という異なる意味を1つの形式で表すのに対し、ペルシア語では、それぞれが別個の表現によって区別されることが分かる。さらに、テイルが担う他の機能も考慮に入れることで、テイルの多義的な性質は一層明確に捉えられるであろう。

[略号一覧]

3: third person, IPFV: imperfective, PL: plural, PTCP: participle, PRES: present

[注]

- 1 ペルシア語では、単純過去形が事象の発生直前を示す（いわゆる「発生寸前のアスペクト」）用法を担うこともあるが、紙幅の都合により、本稿では扱わず別稿で論じることとする。
- 2 ペルシア語の形容詞述語には大きく2種類がある。第1に、語彙的形容詞は、述語として用いる際に原則としてコピュラ (*būdan*) を要する (5a)。第2に、動詞の過去分詞に由来する形容詞は、主語が3人称単数の現在叙述に限り、コピュラの省略が可能である (7)。このように、いずれも形容詞述語であるにもかかわらず、統語的ふるまいには差が見られる。
- 3 また、結果状態が受動的な意味を伴う場合には、過去分詞 + *šodan* (become) の過去分詞 + *be* 動詞からなる形式が用いられる。下の例文において、「書かれた状態」が描写されており、日本語のテイルが結果残存の意味で用いられる場合と機能的に対応する。このように、ペルシア語では、完了後の結果状態を表す際に、過去分詞を中心とした状態表現が選択される。これは、動作継続を表す形式とは明確に区別されており、日本語のテイルが動作継続と結果残存の両義を担うのとは対照的である。

- (i) *ketāb nevešte šode (ast).*  
 book write.PTCP become.PTCP be.PRES  
 「本が書かれている。」

- 4 ペルシア語における進行表現については Jahedzadeh (2022) を、また諸動詞の意味の性質とアスペクト的制約との関係については Jay (2025) を参照されたい。

[参考文献]

許夏珮

- 1997 「中・上級台湾人日本語学習者による『テイル』の習得に関する横断的研究」『日本語教育』95, 37-48。

Jahedzadeh, Behnam.

- 2022 「ペルシア語の進行表現」『言語の類型論的特徴対照研究会論集』5, 91-105.

Jahedzadeh Shorblagh, Behnam.

- 2014 「日本語とペルシア語の構文並列の対照研究」博士論文, 京都大学大学院。

Jay, Behnam.

- 2025 「ペルシア語の状態表現——状態から出来事へのスペクトラム——」『言語の類型論的特徴対象研究会論集』8, 117-132.

Perry, J. R.

- 2002 “Arabic language v. Arabic elements in Persian”. In *Encyclopedia Iranica Online*.  
<https://www.iranicaonline.org/articles/arabic-v/>, 閲覧日：2026 年 1 月 7 日。

Sedighi, Anousha, and Pouneh Shabani-Jadidi (eds.)

- 2018 *The Oxford Handbook of Persian Linguistics*. Oxford University Press, Oxford.